

〈資料紹介〉

『民国佛教期刊文献集成』活用の意味

—中国近代仏教雑誌の重要性—

教授 木場明志
(日本近世近代宗教史)

本学歴史学科は、日本史・東洋史を主軸に教育と研究を続けてきており、2008年度からは歴史ミュージアム・交流アジアの2コースも開かれ、日本・中国をベースに教育・研究活動を増強する方向を明確にしている。筆者はここ20年来、近代における日本仏教界のアジア布教について探求しているが、成果として、日本仏教が「近代的仏教」の名の下に、アジアの「旧来的仏教尊崇地域」に進出しようとしたことが認知されてきたといえよう。

ところが、「旧来的仏教尊崇地域」とも看做した地域に、実は当然のことながら、仏教の近代的発展の歴史があったことが見落とされていた。ことに中華民国期の中国では、仏教改革が強く叫ばれて幾多の論説を生み、数多の仏教結社が醸成され、機関誌の定期刊行などを伴う革新運動が展開した経緯がある。これが見落とされがちであったのは、従来、中国仏教界における民国期仏教への評価が相対的に低かったこと、とりわけ民国期仏教界が日本との結びつきによって発展した傾向に対する低い評価があったこと、そのために資料整理が遅れていたことなどに拠っていた。

今般、2006年に中国で刊行された当該文献集成を本学が研究設備整備補助を得て収蔵したのは、遅れていた中国での資料整理が成った研究現状を享けている。何と、B5版204冊に148種の仏教雑誌・期刊誌を影印復刻して収載しており、中国国家図書館をはじめとする上海・南京・中国科学院・中国社会科学院・北京大学・華東師範大学・中山大学の各図書館、および中国仏教文史館、貴州大学中国文化書院など、十数か所に所蔵される文献

を集成している。

中華民国期仏教史というべきまとまった著述が未だほとんど見られない現況では、盛んに日本仏教界から提携・合同の触手が伸びていた時期の民国仏教が、あるいは提携、あるいは反発した経緯の子細を知ることにおいてほとんど明らかでない。わずかに、日本の東京大学教授末本文美士著『近代日本と仏教』（トランスビュー、2004年）が「日本侵略下の中国仏教」の項を設け、北京図書館所蔵の仏教雑誌を手がかりに、抗日的『海潮音』『獅子吼』、日本傀儡的『晨朝』、親日的『同願』などを例に検討を加え、抗日救国路線を採った太虚法師らの『獅子吼』に民国仏教の特質を見ようとしているのが注目される。

2005年、筆者は、1930～40年代に中華民国に日本仏教の布教を行って中国通として知られた真宗大谷派藤井草宣氏が持ち帰った史料群を、愛知県岡崎市の出身寺院に赴いて調査する機会を得た。幸いに資料疎開によって戦災を免れた資料はダンボール50箱近くにおよび、多数の現地新聞仏教記事スクラップ、および現地刊行の仏教雑誌を眼にすることができた。早速に雑誌名リストを作成し、北京図書館に架蔵するかどうかを本学李青准教授（国際文化学）に調査願ったところ、その半数すらも所蔵しないことが判明した。藤井蔵書はそれだけ貴重な資料とすべきであり、それらに基づいて記事内容の精査を進めつつあった矢先に、本文献集成刊行の僥倖に遭遇したのであった。

清末・民国期の中国仏教は、1873年に渡航して日本仏教の現状を伝えた小栗栖香頂や、



『民国佛教期刊文献集成』全209冊の架蔵状況

居士仏教者として著名な楊仁山と交流した南条文雄らによって、仏教には国家・社会の近代化に資する道があること、また学問としても成り立つこと、などの提起を享けている。復旦大学葛兆光教授の論文「西潮却自東瀛来」(『葛兆光自選集』所収。浙江人民出版社、1997年)によれば、この提言を出発点に中国仏教は近代化に進み、遂には太虚に代表される「人間仏教」の提唱に至ったとされる。それゆえ、清末～民国期の中国近代仏教を知ることなしに日中仏教の交流・反目を語ることができない様相となっている。つまり、日本の近代仏教研究には、広くアジア近代の仏教状況を知ることが欠かせない。その意味で、今般本学図書館に収蔵された本文献集成は極めて有用である。収載書目録、記事名索引、記事作者索引が併せて別冊で5冊付加されており、太虚による雑誌記事だけでも1230篇におよぶ。また、収載148誌それぞれの書誌を第1巻の巻頭に収めるのも行き届いた配慮である。

あまりに内容豊かで整った文献集成であるため、筆者としても内容をフル活用した研究成果を示すまでに到達しないで格闘する日々が続きつつある。とはいえ、本文献集成に収められていない本学図書館所蔵の民国期刊行雑誌、あるいは前述藤井草宣収集雑誌なども併せながら、東洋史はもとより、交流アジア・日本史の諸観点から、未踏のアジア近代仏教史の構築に向けてなお努力を続けていく所存である。